
約束

永峰 夾架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束

【Nコード】

N5045E

【作者名】

永峰 夾架

【あらすじ】

「ずっと、ずっと側にいてくれるよね？二人の『約束』だよ。」

1話：里菜side

私は一応アイドルをやっている。とは言ってもまだまだ知名度は低いんだけどね……。
しかも、1チーム16人で3チーム……つまり全体では48人。
ほとんど毎日のように劇場のある秋葉原で公演をしている。

『会いに行けるアイドル』

それが私たちのコンセプト。
秋元先生が言っていた。

その名も『AKB48』。

私、中西里菜はチームA。
ダンスが好きでオーディションを受けた。

合格通知が来た瞬間、嬉しくて嬉しくて仕方なかった。

それと同時に、あの子の合否が気になってしまった。
あの子は、小さいながらも独特な存在感があって、私は視線を反らすことができなかった。

『高橋みなみ』

…そう、きつと今の気持ちはあの時からだったんだろう。

歌が上手で、すごく可愛くて、何をするのも一生懸命。本当は疲れ
てるはずなのに、いつもメンバーやお客さんに笑顔振りまいてい
た。

最初はこれが恋なんて気付きもしなかった。

だけど、確実に惹かれていたのは確かだった。

今日は、シアターで公演がある。

最近私たちチームAは公演回数が少ないような気がした。

それもそうかもしれない。

女優業に励む人、テレビの司会業に励む人がいるAでは、メンバー
全員が揃って公演できないのだから。

だけどやっぱり寂しい。

たかみなの笑顔が見れない、声が聞けない、自称滑らない話が聞け
ないなんて……。

私、重症だなあ……。

なんて考えながら歩いていると、誰かが居るのに気がついた。

何か絡まれてるよー……って、あの身長は…たかみな？

近付いていくと、ファンに囲まれて苦笑いをしているたかみながい
た。

「あ、りなていん！」

私に気付いたたかみなは、助けを求めるように私の名前を呼んだ。

「どうしたの？」

「えっと…、バレちゃいましたっ」

たかみなはこんな時まで可愛い。

って、そんな事よりどうしよう……。……逃げちゃえ！

私はたかみなの手を握ると猛ダッシュでシアターに向かって走った。

「はあ…っ…いきなり走らないでよっ」

たかみなは息を切らしながら、私を見上げてきた。その姿がとても愛しくて、たまらなくなつた。

そして、気付いたら私はたかみなの抱き締めていた。

「り…なていん…？」

普段とは違う私の様子に驚いているみたい。

「たかみな、もう心配させないでよね？」

バレてはいけないと、私は必死に平然を装い苦笑いすると、たかみ
なを離し、着替えに向かった。

「私…なんなんだろう…。」

ロッカーの前に立ったままでいると、誰かに肩を叩かれた。

「あ、めーたん…。」

「里菜悩み事？」

私で良ければ話、聞くよ？」

めーたんは何でもお見通しだなあってつくづく思わされた。

めーたんなら大丈夫かな…？…話してみよう！

心の中で自分と相談して、大丈夫だと判断すると、私はめーたんに
話し始めた。

「そっか…。。つまり、里菜はみなみが好きなのね？」

「…す、好きって言うていいのかな？…でも、女同士だし…。」

私はよく分からなくなり、少し俯いた。その瞬間、私は暖かいもの

に包まれた。

めーたんに抱き締められていた。

何だかとても落ち着いて、気付いたら抱き付いて泣いていた。

「め…たん…、めえたん…」

めーたんは私が泣き止むまでずっと頭を撫でていてくれた。

1話：みなみside

りなていん、何かあったのかな？……聞いてみよう。

私はりなていんの後を追うようにしてロッカールームに向かうと、そこにいたのは、りなていんと…

「めーたん…？」

二人は抱きしめあっていた。

二人ってこういう関係だったの…？……そうか、りなていんが元気が無かったのはこの事だったのか。

私は納得したつもりだった。だけど、何か心の中がもやもやしてた。なんなんだろう？この気持ち……。いつもの事じゃん。…気にするなんてらしくない。

そう思おうとしても、さっきの二人の姿が脳裏に浮かんでしまう。

「嫌だ…。」

りなていんがいなくなっちゃうような気がする……

私は、急いでその場を去っていった。

見たくなかったのか、認めたくなかったのか、どっちかなんて私にも分からなかった。

ロビーに戻ると誰も居なくて、少し寂しいような、ほっとしたような気持ちになった。

「たかみなー、そろそろ始まるよ！」

奥から呼ばれた声にハッと、急いで着替えに行った。

その時、りなていんとめーたんもロッカールームにいた。

私はわざと視線を合わせないで素早く着替えてステージに上がった。公演中も歌とダンスに身が入らなかった。そのお陰で振りを少し間違えてしまった。

「たかみなが間違えるなんて珍しいね。」

そうメンバーにも言われたし、夏先生にも注意されてしまった。

本当についてない……。

楽屋でみんなが騒いでるのをよそに、私は一人でボーっと考え込んでいた。

2話：里菜side

今日のたかみناهは何かおかしい。

普段は振りを間違える事なんて無いのに……。
しかも、楽屋でも大人しい。

これ以上心配させないでよ……。

そう思うのと同時に、私の体はたかみなの居る方へと向かっていった。

「たかみな元気ないね。」

隣に座って

「なんかあった？」と探るように声を掛けてみた。

返事も無いし、こっちを向いてもくれない。私はたかみなほっぺを指で軽くつつこうとした瞬間……

「触らないで!!」

たかみなは大声でそう言うと思いつきり私の手をはじいた。

私も他のメンバー達もみんな驚いてしまった。

「ごめん、少しほっといて」

申し訳なさそうな表情をしながらたかみなどはどこかへ行ってしまった。

2話：みなみside

あんな大きな声初めて出したかもしれない。

ただ、これ以上あそこに居たくなかったし、二人を見ているのが辛かった。

「嫉妬…かな……？」

「誰に嫉妬？」

小さな声で呟くと、不意に後ろから声を掛けられた。

「…めーたん……。」

「何よ、そのもの凄く嫌そうな顔。」

めーたんは苦笑いしながら、私の隣に座った。

「さつき、見てたんでしょ？」

めーたんのこの言葉に、かなり動揺してしまった。
まさか気付かれてたなんて思いもしなかった。

「…気付いてたんだ？」

「一応はね。」

「……言っとくけど、何も無いわよ？」

「…え？」

いきなりの事に、すごく間抜けな声を出してしまった。

何も…無い…？

驚いたと言うか、拍子抜けしたと言うか、何とも言えない気分になった。

「里菜の相談にのってただけ。」

「安心した？」といつものように笑いかけてくるめーたん。

「本当に…？

だったらりなていんに謝らないと…」。」「

立ち上がって歩き出そうとした時…

「みなみ、あなたは里菜の事をどう思ってるの？」

いつになく真剣な表情をしたためーたんが、私を真っ直ぐに見つめて問いかけてきた。

「…好き…かもしれない。」

実際、恋愛なんてしたこと無いし、どんな感覚なのかも分からない。だけど、りなていんだけは失いたくない、そう思った。

「今のあなたには100点の答えよ。」

頭を撫でて

「がんばれ」と言ってくれたためーたんに感謝しながら、私はまだりなていんが居るだろう楽屋へと向かった。

許してくれるかな…？

そんな不安がこみ上げてきた。「りなていん！」

姿を見た瞬間に私はりなていんに抱き付いた。
りなていんは驚きながらも、きちんと受け止めてくれた。

「どうしたの、たかみな？」

冷たく当たってしまったのにも関わらず、いつも通りに接してくれたりなていん。やっぱり、大人っぽいなあ…と改めて思った。

「さっきはごめんね。」

私、誤解してて……めーたん……嫉妬……してたの。」

自分で言っといてももの凄く恥ずかしくなってきた。

「え……？……嫉……妬？」

驚いたように目を見開いているのがよくわかる。

「私、りなていんの事……好き……だよ。友達とか、メンバーとしてじゃなくて、一人の人として。」

あーあ……。

きつと今、顔が真っ赤……。

「……嬉しい。」

りなていんが小さく呟いた。

聞き取り難い大きさの声だったのにも関わらず、私にははっきりと聞こえた。

3話：里菜side

今信じられない言葉が聞こえたような気がするのには気のせい？

確かに好きって……。

「……嬉しい。」

思わず声に出してしまった。

それにしても……たかみなの顔が真っ赤になっていてすごく可愛い。

「みなみ……好きだよ？」

わざと『たかみな』から『みなみ』に変えてみた。

気付いてもっと真っ赤になっていった。

「私もだよ、里菜。」

不意に名前と呼ばれ、体が熱を帯びてくのが分かった。

私は我慢できなくなつて、みなみの唇にキスをした。

最初は驚いていたみなみも、次第に自分からするようになった。

物音が聞こえ、唇を離すと名残惜しそうに銀色の糸が二人の口元でひいた。

「まだいたの？早く帰りなよ？」

どこか行っていたみたいちゃんが戻ってきたらしい。

私たちは帰る用意を済ませると、二人一緒に帰路についた。

もちろん、手をつないで……。

「 E n d 」

最終話

「もう心配かけさせないでよね？…本当に心配しちゃうから。」

里菜が心配な顔でみなみに話しかけると、みなみは幸せそうに笑い…

「里菜がいるから大丈夫だよ。……だから、側にいてね？」

「うん。」

「『約束』だよ！」「」

[. 028]

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5045e/>

約束

2010年11月2日03時51分発行